

C-21 庶民衣服の研究 —仕事着の被服構成(3)—

淑徳学園高 田中 陽子

1. 1849年、身分別人口、百姓76.4%とある。(近世日本の人口構造、関山直太郎著より)即ち明治初年までの国民の大半は、仕事着の着用であったことを考えると、日本衣服の系統、変遷、発達の中で、仕事着は重要な位置をしめるものと考えられる。又その衣服形態は、古来の小袖形態の定着とみられ、現在は、その最終着用期とみられる、明治、大正の残存物が、もはや消滅の寸前であって、有形、無形の資料を収集、調査することの急務を感じるものである。数世紀前の遺物は皆無であるが、その構成技術のある程度はその中にみられるのではなからうか。

2. 先に「袖の形態」に関して、地方調査を行ない、各形態の機能性の特徴を、作業別、地方別で発表したのが今回は「上衣みごろ」を、同様に検討したものである。

調査地方は、埼玉県、千葉県、神奈川県、静岡県、長野県、山形県、秋田県、青森県の各県の一部地方であり、今後も事情のゆるす限り、調査研究を続行したいと考えている。

3. 水田耕作、畑作耕作、山樵、狩猟、釣漁、網漁等、その作業と、又自然条件の相違により、仕事着の形態構成が、生産労働にきたえられた生活に密着している。地方服の名もある如く、その地方独特の構成が生じたことも前述の理由による。何れも簡潔にして、用に徹した衣服の成立には、その時代的影響があったことは、みの

为世人所自由，为自由而斗争。